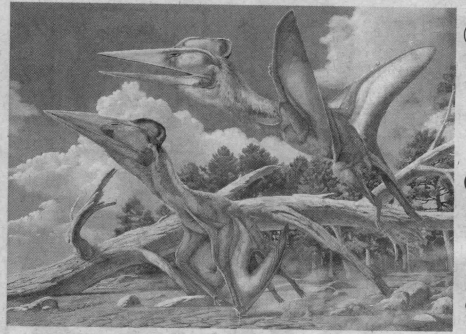


翼竜化石、新種と判明

熊本県御船町にある約1億50万～6600万年前（後期白亜紀）の地層から発掘された化石が、膜状の翼で空を飛ぶ大型爬虫類「翼竜」の新属新種だと分かった。化石を展示している同町恐竜博物館などの研究チームは、「ニッポノプテルス・ミフネンシス（ラテン語で「御船産の日本の翼」）と命名。国内で見つかった翼竜の化石に学名が付けられるのは初という。

化石は翼竜の頸椎（けいちゅう）の骨で、町教育委員会が1996年に発掘。これまでの研究で、首の長い大型翼竜「アズダルト科」の仲間と分かっていたが、比較できる化石が少なく、属や種は明らかにならなかった。

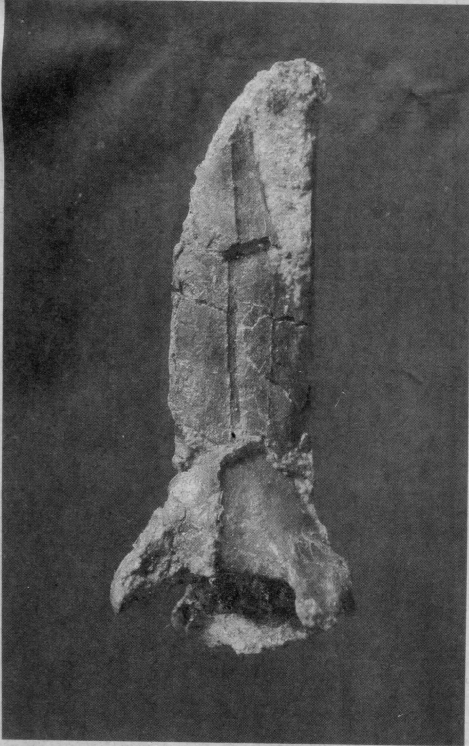
研究チームは、CTスキャナーを用いた分析や、その後に見つかった約200種の翼



ニッポノプテルスの復元画
©Zhao Chang

竜化石との比較により、形状の特徴から新属新種と結論付けた。論文は今年3月、国際学術誌「クリテイシャス・リサーチ」に掲載された。

同博物館の池上直樹主任学芸員（57）は、「日本付近の空を翼竜が飛んでいたことを示す重要な研究成果だ」と強調。「国内の翼竜研究の扉を開いた」と喜んだ。



ニッポノプテルスの頸椎骨の化石
（御船町恐竜博物館提供）